

お知らせコーナー



「畔蒜郡の役所跡 発見か!？」 —木更津市丹過遺跡—



調査で発見された掘立柱建物の柱穴(手前の小さい穴は廂の柱のものです)

丹過遺跡は、木更津市茅野に所在し、東京湾へと注ぐ小櫃川の東岸にある遺跡です。平成14年4月から、首都圏中央連絡自動車道(圏央道)の建設に先立ち発掘調査を実施しています。

遺跡では、縄文時代後期から奈良時代までの穴や溝、竪穴住居跡などが調査されました。中でも注目されるのは、整然と立ち並ぶ奈良時代前半頃の掘立柱建物群と、奈良の都で使用されていたものと同じかたちをした土器などです。

当時この地域は上総国畔蒜郡と呼ばれていました。今回の調査成果や、この地域に残る「下郡(しもごおり)」という地名等から、この遺跡は昔の役所跡の一部ではないかと注目を浴びています。

写真の復元模型は、調査地の中で中心的な建物と考えられる西に廂を持つ建物と、その南側に続く回廊状の建物を復元したものです。建物の前(西側)は広く開けられていることから、そこでは儀式や宴などを行っていたのかもしれません。

この夏に行われた「現地説明会」では、多くの人々が訪れ、古代に思いをめぐらせていたようです。

掘立柱建物の復元模型



廂がつく建物に回廊がつながっている様子



縄文人のイヤリング —一块状耳飾—

今回紹介する遺物は「一块状耳飾」といいます。写真の耳飾りは、柏市富士見遺跡の竪穴住居跡から見つかりました。直径4cm、厚さ0.7cmの石製品で、切れ目の入った平べったいドーナツのような形をしています。一緒に出土した土器から判断して、今から約5,500年前(縄文時代前期)頃のもので、使用法は、現在のピアスのように耳たぶに穴を開け、直接「一块状耳飾」の切れ目を通して、耳に付けていたと考えられます。



富士見遺跡出土一块状耳飾

一块状耳飾装着想像図

当時は、特定の人物しか身につけていなかったようですが、いったいどんな人が身に付けていたのでしょうか？全国各地で流行し、関東地方では石製のものだけでなく、粘土を焼いて作られた土製の「一块状耳飾」も使用されていました。

公園の緑に眠る 古墳と集落

—千葉市荒久遺跡と荒久古墳—



昭和62年4月、千葉市青葉町の農林水産省畜産試験場跡地に県立青葉の森公園を整備するため、発掘調査が始まりました。予定地内では明治時代から荒久古墳の存在が知られていました。調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけてのムラが営まれ、奈良時代以降の墓も数多く造られていたことがわかりました。

ムラの跡からは県内でも珍しい弥生時代中頃の板状鉄斧や、古墳時代前半頃の鉄鎌などが出土しました。

遺跡の一部は県立中央博物館の生態園として樹林が保存されることになったので、発掘はせず、盛土保存されました。

また、遺跡内に残る荒久古墳は、7世紀に築造された一辺20mほどの方墳で、昭和34年に調査された時には、切石を積んで造られた石室(亡骸を納める部屋)から人骨と琥珀の玉、鉄製馬具などが発見され、古墳時代の終わり頃の様子をよくあらわしています。

現在は一辺約9mほどになってしまいましたが、千葉市指定史跡として現状のまま整備保存されることになり、青葉の森公園の一角に大クスノキとともにその姿をとどめています。

荒久遺跡



昔

中央博物館



今

(写真提供：千葉県立中央博物館)



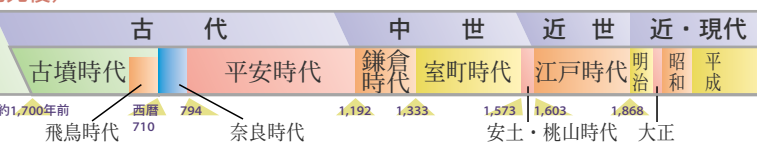
荒久古墳

日本の時代区分表

旧石器時代

縄文時代

弥生時代



(注)日本の旧石器時代の始まりについては、現在、再検討されています。よって、本紙では、新たな見解が発表されるまで、年代の記載を中止いたします。

(この表は、100年を5mmで表現してあります。したがって、縄文時代は約50cmにもなります。)